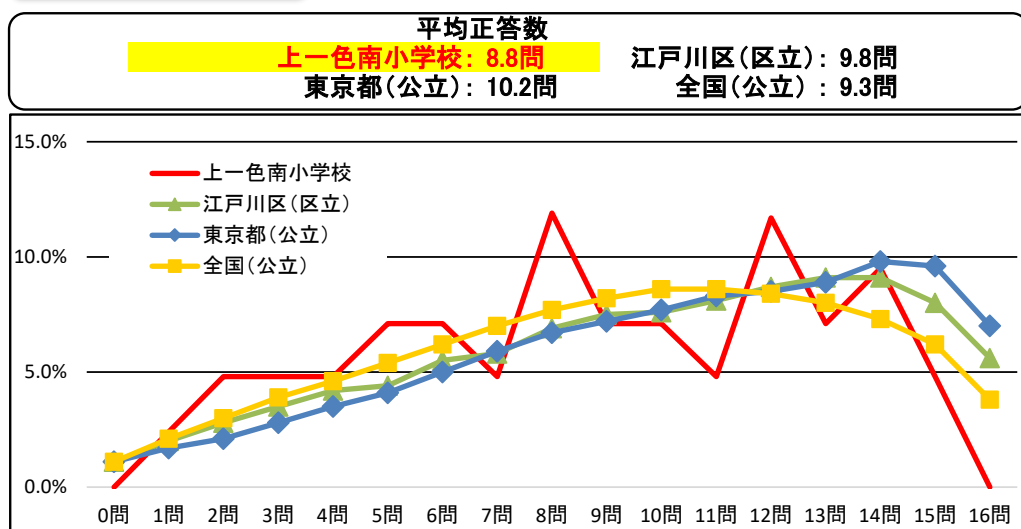


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【算数】上一色南小学校

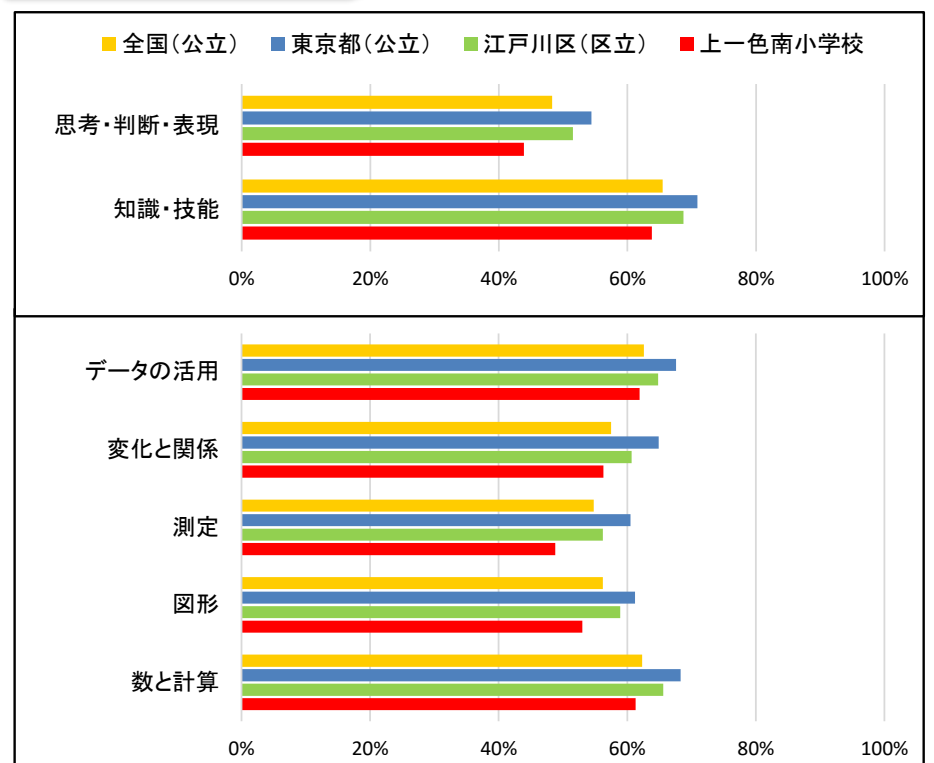
正 答 数 分 布



【平均正答率の差】

上一色南小学校	55%
江戸川区(区立)	61%
東京都(公立)	64%
全国(公立)	58%
都との差(ポイント)	-9.0

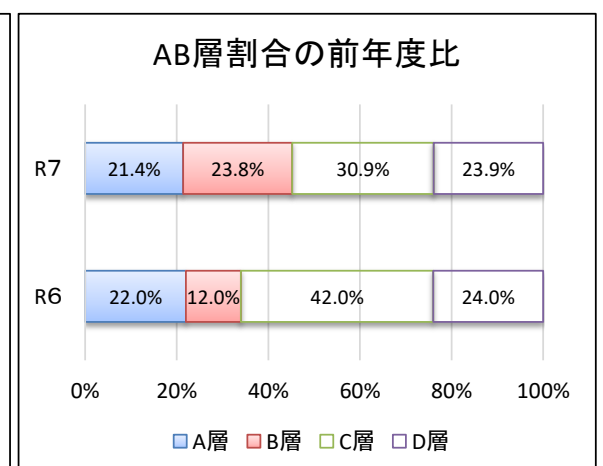
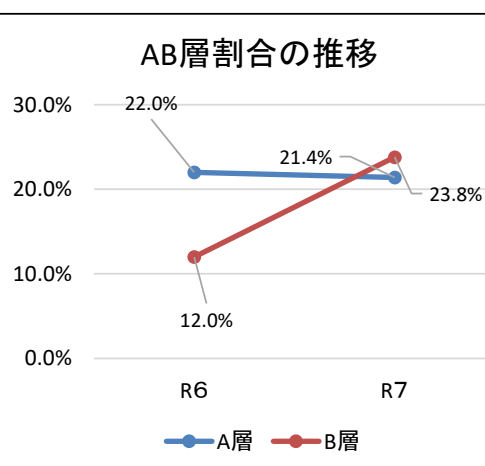
「領域別」の結果



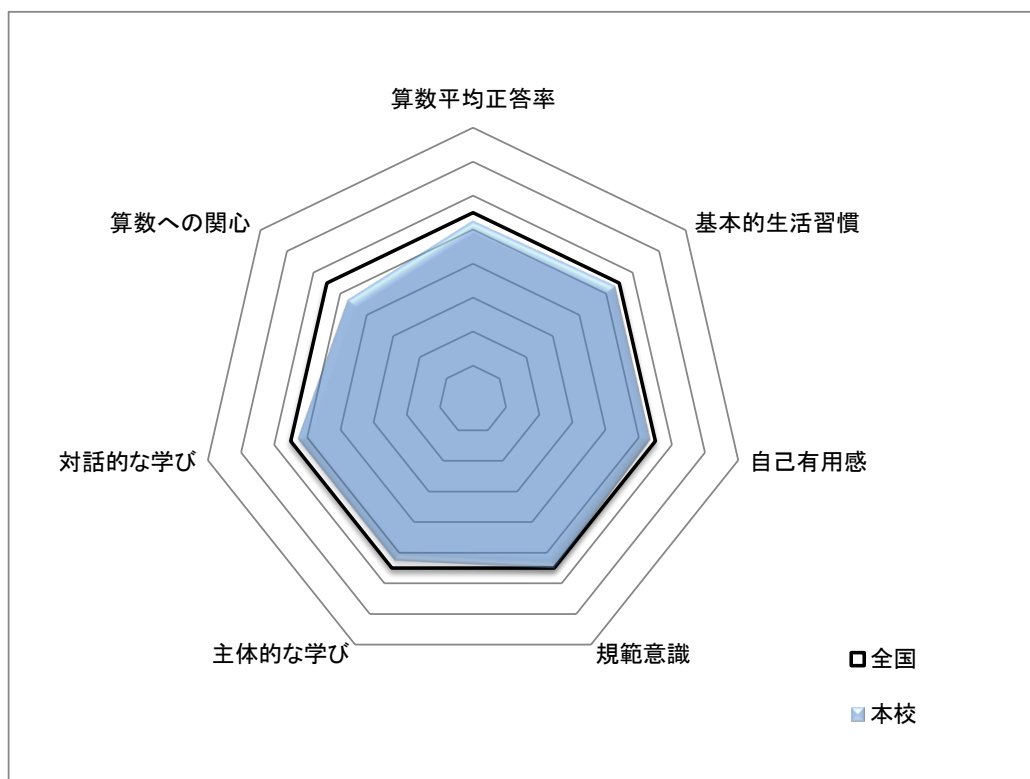
四分位における割合（都全体の四分位による）

算 数	上位 ←				→ 下位			
	A層 14～16問	B層 11～13問	C層 7～10問	D層 0～6問	A層 14～16問	B層 11～13問	C層 7～10問	D層 0～6問
上一色南小学校	21.4%	23.8%	30.9%	23.9%	21.4%	23.8%	30.9%	23.9%
江戸川区(区立)	22.7%	25.9%	27.9%	23.5%	22.7%	25.9%	27.9%	23.5%
東京都(公立)	26.4%	25.7%	27.6%	20.3%	26.4%	25.7%	27.6%	20.3%
全国(公立)	17.3%	25.0%	31.4%	26.3%	17.3%	25.0%	31.4%	26.3%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《チャートの特徴》

「算数への関心」が最も下回っているのは、児童質問調査の「算数が好き」の設問に対する肯定的回答の割合が全国より20%以上低いこと、「授業内容がよく分かる」の設問に対する肯定的回答の割合が全国より10%以上低いことが原因である。しかし、「A・B層」の割合は昨年度(令和6年度)より向上しており、この点について児童が自信をもちきれていないことが考えられる。他の項目については、ほぼ全国の値と同等であり、学校で取り組んでいる生活意識向上の取組の成果が現れている。

《家庭・地域への働きかけ》

保護者会や学校ホームページ、tetoruの活用等を通して、本校の生活指導目標を示した「7つの合言葉」の取組状況を地域や家庭と共有し、基本的な生活習慣の改善に生かしていく。

《現状把握》

●AB層の割合と取組内容について

東京都の値と比較すると、「A・B層」の割合が若干低く、「C層」の割合がやや高いが、全体的に見てバランスがとれ、全体の底上げが図られていると見ることもできる。全国との比較では若干上回る結果となっている。昨年度と(令和6年度)と比較すると、「A層」はほぼ横ばい、「B層」は11.8%向上した。算数の学習では、習熟度ごとに分けて少人数指導を実施しており、この継続的な取組が着実に成果として現れている。

《学校の取組》

・教員の指導力向上

本校は昨年度(令和6年度)まで3年間、江戸川区教育課題実践推進校(学力向上)として、算数を中心に学校全体で研究活動に進めてきた。その中で、教師一人一人の「指導力向上」を図ってきたが、今年度はその「成果と課題」を踏まえながら、さらに研究を深化させている。「すすんで考え、自力解決の楽しさを実感できる児童の育成」を研究主題に据え、教師の指導力と児童の学習意欲の向上を目指して授業実践に取り組んでいる。

・基礎学力の保障

学年の始めの時期(4～5月)に、東京ベーシックドリルの診断シートを活用して、児童の理解状況を客観的に把握している。その結果をもとに、具体的な指導改善の方策を立て、指導に生かしている。また、タブレットを使用して、算数の授業開始時に四則計算の復習に取り組んだり、デジタルドリルを問題練習や宿題で活用したりすることで、学習内容の定着を図る。さらに、習熟度別少人数指導の利点を生かし、授業時間内に適用問題まで取り組み、理解を確実なものとしていく。

・学習習慣の確立

今回の児童質問調査では、「算数への興味や関心」、「有用性に対する意識」が低い傾向が見られた。そこで、本校の研究目標である「すすんで考え、自力解決の楽しさを実感できる児童の育成」を実現する取組を通して、児童に学ぶ楽しさを経験させるとともに、自ら学ぼうとする意欲を育て、学習習慣を身に付けさせたい。また、調査結果を児童と共有し、確実に算数の力を伸ばしてきていることを伝え、自信につなげていく。

・AB層の育成

習熟度別少人数指導を確実に実施することにより、児童一人一人のつまづきを的確に把握し、それを教員間で共有することで各児童のつまづきを取り除いていく。また、学習内容の定着のために、習熟度に合わせた指導法や教材を研究し、指導に生かしていく。「A・B層」の割合が50%を超えることを目指す。